
気まぐれ猫の散歩

月猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ猫の散歩

【Zコード】

Z3341Z

【作者名】

月猫

【あらすじ】

人に疎まれ、苦しい思いをしてきた、元猫・現在妖怪の彪ひょう、妖怪や、靈が見えてしまい、気味悪がられてきた両親のいない少女、ほたる。

そんな2人が出会いつて、いろいろと学んでいきます。

記憶（前書き）

初めまして。月猫です。
思いつめでつてこるので、べのへりこ続くかべりこーですが・・・
宜しくお願ひします。

辛い事、悲しい事、いろいろあつたさ。人は、嫌いだ。ずっと一緒に言つて、優しいフリしてすぐ裏切る。もう期待して、裏切られるのはごめんさ。なのになぜ、こんなことになつたのかな・・・？誰か教えてよ。

私の名は、彪ひょう オス。1番最初に、飼つてくれた人がつけてくれた。1番はじめに飼つてくれたのは、年老いた、おばあさんだつた。わたしは、まだ子猫だつた。この人は優しくしてくれた。まだ目も開かないうちに捨てられた私を。幸せだつたけど、そう長く続かなかつた。おばあさんが死んでしまつた。引き取り手がないわたしは捨て猫となつた。

そうしているうちに、今度は男の子に捨てられた。大切にしてくれたけど、大きくなるにつれて、相手にしてくれなくなつた。そして、疎まれるようになつた。この時、わたしは4歳。男の子の家を飛び出し、再び、捨て猫となつた。

次は、大人の男に捨てられた。男は一人暮らしをしていた。アパート暮らし。狭くて、汚い部屋だけど、仲良く暮らししていた。けれど世の中は、不景気になつていて。男は、会社をリストラされた。1日中家について、段々と私にハツ当たりするようになつた。酒癖も悪くなつていつた。ある日、いつものようにハツ当たりされた。抵抗したけど、意味は無く・・・。そして私は死んでしまつた。私が7歳の頃。

死んでもらも、死にきれず、ついに・・・。妖怪となつてしまつた。妖怪となつた私はもう、猫ではない。真っ白で、トラック1台分はある。耳は後ろに倒れ氣味で、尾は長く、フサフサ。大犬の姿に似

ていた。それでいて、猫の姿おとこにも戻れる。白くて、丸い姿に。尾は、丸くて短いけれど。何やら妖力おとからも強いようだし……。これなら、もう、人の世話になんかならなくて済む。私は自由になつた。

せたるの#貼りみ（複数用）

更新遅れて、すみませんでした。
これからもいろんなことがあつたりするかも知れませんが、よろしく
お願いします。

ほたるの話しみ

5歳の頃、私は両親を亡くした。

五ヶ瀬ほたる。中学2年生。

わたしには、秘密がある。それは、この世の者でないもの。

信じてもらえないだらうけど、妖怪や、靈が見える。

両親を亡くしてからは、親戚を転々としてきた。しかし、わたしは妖や靈を見る、不気味な子。周りの人から見たら、嘘つき、気味悪い、変な子、というふうでしかない。そのため、だれもきちんと引き取ったがらなかつた。

今住んでいる家の人は、母方の遠縁。今までにないくらい、優しい人たちだつた。こんなにいい家はない。ずっとここにいたい。この人たちに、不気味な思いはさせたくない。そう思つて、妖怪や靈を見る事は、秘密にしている。

けれど、家にいたら、いつかその事がバレそうで・・・。学校が終わると、近くの森の中で過ごす事が多くなつた。

またの机（後書き）

感想待つてます

出合った

今日は、雨が降っている。普通だつたら、森になんか行かない。ほたるは、森の入口で立ち止つた。

普通だつたら・・・。

そう思つていたのに、森の中に入つて行つてしまつた。來てしまつた・・・。

とにかくため息をつくしかない。まあ、雨も少ししか降つていなし、少しくらい良いか。

その時だ。

ドスン！――！――！

後ろで音がした。ドキドキしながら、恐る恐る振り向く。そして悲鳴を上げそうになつた。思わず腰が抜けた。後ろにいたのは・・・。大きな獣だつた。白くてとにかく大きい。目は、銀色。耳が後ろに倒れ氣味。尾がとにかく長い。

「む。なんだ、人の子か」

低い声。多分これは・・・。

「妖怪なの？」

「当たり前だ」

そりや、そりだらう。これが、普通の動物なわけがない。

「お前には、私がみえるのか？」

「まあ・・・」

話も出来るし、見えている。

「雨が降つてゐるのに、何をしている」

そこまで来て、やつと落ち着いた。はたるは立ち上がる。

「関係ないでしょ」

「ふん。ふてぶてしい奴だ」

そんなこと、妖怪に言われたくない。

「あんたこそ、突然何よ」

「少し散歩していただけだ
そういえば、コイツには話が通じる。またね、わざと話してみ
ることにした。

雨がやんだ。ほたるは傘を閉じた。

「さつさと帰れ」

大きな獣が言った。

「なによ。ここにいてはだめなの？」

ムツとしたように聞いた。

「お前、人間だろう？私が怖くはないのか？」

「そりやあね。怖いけど。でも、私の事を食べたりしないでしょ？」

大きな獣がため息をついた。

「ふふ。妖怪とこんなに長くはなしたの、初めてだよ。あんた、名前は？」

大きな獣はじつとほたるを見つめた。そして突然・・・。

どろん

小さな猫になつた。

「わあ・・・。なんなの？その姿」

「気にするな。どちらも本当の姿だから。私は彪だ」

「私、ほたるつていうの」

猫姿になると、あまり表情が変わらない。

「では、ほたる。人の子があまりここへ、一人で来るんじゃない」

「なぜ？」

「ここは妖が多い。見えるお前など、食われてしまつかもしれないぞ」

彪は口を細めてからかうような口調で言った。

「そうなの？忠告ありがとう。でも、ここはわたしの大切な居場所でもあるの。・・・ねえ、明日も来ていい？」

「私はここへは来ないよ」

そう言われても、ほたるは来るつもりだった。それが彪にも伝わっている。

「バイバイ、彪

ほたるは手を振つて別れた。

帰り道。かなりテンション高めで歩いていた。

「そこの人の子」

「おーーーい」

精一杯呼んで

さな祠のある稻荷神社だつた。

「誰かいるの？」

ほたるは恐る恐る、足を踏み入れた。そして、祠の前に来た。

卷之三

もつと下の方からだ。下を見ると・・・。

「ふう。やつと気が付いた」

もう慣れた。

「何か用？」

「一むやみに見えたのだが、

「見えるよ。私はほたる。・・・・君の名前は?」

「私は葛の木。ほたる、少しの間、力を貸して頂きたい」

「…・回りの人に聞かれて、結構かまわぬ。あまり聞つて、

•
•
L

「そんなこと言わずに。忘れられたこの場所に住んでる、わたしの

葛の木は立あはざの跡に

葛の木は泣きながら言つた。ほたるも、泣かれてはかなわない。

「分かつたよ。何すればいいの？」

「おお。ありがたい。手伝ってくれるか」

葛の木は大喜びしている。ほたるは、はあーっとため息をついた。

稻荷神社で・・・（後書き）

どうだったでしょうか。感想、意見頂けたら嬉しいです。

彪が猫姿の時の姿には、いろいろ理由がありますが、私の想像したのだと・・・。

尾が短いのは、野良猫時代にケンカして・・・。ということです。街中でそういう猫がいると悲しくなります。太っているのは、人間から解放されて、沢山美味しいものを食べたから、という設定にしています。

また、読んで頂けると嬉しいです。

忘れられた場所

「それで、何をすればいいの？」

「まあ、話を聞いてくれ。……おつとその前に……」

葛の木は、祠の奥に行き、戻ってきた。

「……何？そのお面……」

葛の木は、狐のお面をしていた。

「失礼な。私は狐の神なのだ。面をしたままでは失礼だから、面を外して挨拶したのだ」

「えー————！？かつ……神様だったの！？くつ……葛の木様……」

「ああ。タメ口、無礼三昧……。祟られる……。

「はは。気にしなくていいぞ」

なんて心の広い神様なのだろう。

「実はね……。ああ、ちょうど来た」

「ちょうど来た？」

葛の木様が見ている方には、若い女人だ。

「まさか、あの人人が好きだから、告白したい……とか？」

「阿呆。違う。まあ、見ておれ」

「あら。こんにちは」

突然、後ろから声がした。振り向くと、若い女人だった。

「こ・・・ここんにちは」

慌てて返す。

「見る。この人を……」

葛の木様は、ヒソヒソと言つた。言われたとうりにする。そして、ビックリした。

「見えるか？」

黙つてうなずく事しか出来ない。女人は、お供え物をして行つてしまつた。

「な、な、見えただろ？」「

「うん」

女の人に憑いていたもの。それは・・・。

「あれは・・・。妖怪？」

「そうだ」

黒くて、恐ろしい妖怪だった・・・。ほたるは葛の木を見つめた。葛の木は語りだした。

あの女の人は、若菜さんといつて忘れられたこの場所を唯一挙んでくれる人。ところが最近、妙な妖怪に憑かれてしまつたのだ。

「あのままで、若菜さんの命が危ない。そんな時、お前を見かけたんだ。人の子のくせに、妖力の強いお前に目をつけていたんだ」実際、若菜さんは力が弱まつていて感じがした。

「で？どうしてほしいの？」

「あの妖怪を、追い払つてほしい」

「えつ！？」

追い払う？そりやあ、出来るならやつてあげたいけど・・・。

「『めんだけ』、私、そんなこと出来ないよ」

「なぜだ。お前ならできる。お願いだ」

葛の木様は泣いている。

「私は、陰陽師とか、神社の神主とか、尼さんとかじゃないんだよ」

「うう・・・・・・」

葛の木様は、ワーワーと泣きだした。ほたるも泣く子にはかなわない。

「分かつた。分かつたよ。出来ることはやるから」

結局、昨日と一緒に流れだよ。それにしてもさつき、若菜さんに憑いていた妖怪・・・。何か、変な感じがしたな・・・。どうしてだらう・・・。

翌日。

「おーい。葛の木様——」

学校帰りに、稻荷神社へ寄つてみた。葛の木様は、祠の前に座つていた。

「こんにちは。葛の木様。・・・若菜さん、来た?」

「おお。ほたるか。まだ来てないぞ」

葛の木様は、少々退屈そう。

「そうだ。葛の木様、飴いる?」つそり鞄に入ってきたんだ」

取り出したのは、イチゴ味の飴玉。

「ルール違反はいけないぞ」

そう言いながらも、嬉しそうに飴玉を受け取つた。

「甘つ。甘くて、美味だ」

意外に食いしん坊な一面もあるのだ。そんな事をしていると、若菜さんが来た。

「こんにちは」

若菜さんが言った。

「こんにちは」

ほたるも返す。

「あなたもお参りに?」

「ええ。・・・まあ」

まさか、葛の木様とお話に来たなんて言えない。若菜さんは、ゴホッゴホッと変な咳をした。背中には相変わらず、妖怪が憑いている。若菜さんは、綺麗な花をお供えした。葛の木様は、ほたるの肩に乗つて、若菜さんを見つめていた。

「ふふ」

若菜さんは、一人で笑つた。

「『』めんなさいね。思い出し笑いをしてしまつた」

そして、少し悲しそうな顔をした。

「私、10歳のときに母を亡くしているの。」
田中は、母との思い出の場所でね。・・・母が亡くなつた時悲しくて、泣いていたら、誰かに頭を撫でられたの。顔を上げたら・・・」
そこで少し黙つた。田はどこか遠くを見ている。

「狐の面をした、男の人がいたの。その時はビックリして、逃げ帰つてしまつたけど・・・。もしかしたら、この祠に住んでいる神様だつたのかしらって・・・」

それだけ話して、帰つて行つた。ほたると葛の木は、若菜さんの後ろ姿を見送つた。

「そんなことをしたの？」

「ああ。若菜さんはすゞく悲しそうに泣いていたからね。慰めてあげたくて。私は、笑っている若菜さんが好きだからね」

1

「ん? 何か言った?」

でも、確かに聞こえたような・・・。

「…が…」

卷之三

「えつ？ 一
もこの気配 あの奴性しや」

聞いた時。

「ホシイ。チカラガホシイ」

「うそ…………!!!!!!」
シーッと妖怪が来るのが見えた
若菜さん憑いていた……

ほたるは、葛の木様を乗せたまま走りだした。

ああ。やはり来ていいか。彪は、昨日、ほたると出会った場所に

来ていた。しかし、ほたるはいない。何、人間のことなんて信じて
いるんだか。やつぱり帰ろう。

ハアハアハアハア

声が聞こえる。・・・・・声？

ハアハアハアハアハア

ガサガサガ

誰か走つてくる。・・・この匂い。・・・あッ！！！

ハアハアハアハア

「あつ。彪！！！」

ほたるが走つてきた。その後ろから来るのは・・・。

「あつっ

「彪・・・なんか・・・追わ・・・れて・・・て」

ほたるは息を切らしてゐる。

「もーーー。何やつとるんだ」

彪は、追い払おうとした。しかし、妖怪の方も逃げ足が速い。

「ギャつギャツ」

妖怪は、逃げて行つてしまつた。

悪靈祓い その弐

「で、今日は何を連れているんだ?」

彪が面倒そうに聞いた。

「これ?これは、葛の木様。くずのき 稲荷神社の神様」

はあ、とため息をつく彪。

「彪。お願いがあるの。実は・・・・・」

ほたるは彪に、事情を話した。

「なるほどな」

彪は、明らかに面倒そう。ほたるは、ずっと氣になっていた事を聞いた。

「葛の木様って、神様でしょ?妖怪を祓うことなんて、簡単でしょ?」

葛の木様は、ため息をついた。

「信仰の薄れとか、まあ色々で、おから 妖力が弱まってしまったのさ」

「それで。あんな悪靈をほたるに祓つてもらおうとしたのか・・・・

・・

「悪靈!?悪靈だつたの?」

ほたるは驚いた。

「しかも。あいつ、鬼水晶持つているだらう」

彪が、ニヤつとした。

「鬼水晶?」

「昔、この辺を荒していた鬼共を退治しようとした、陰陽師がいたのさ。だけど鬼共の妖力が強くて、結晶となつて残つてしまつたのさ。それが鬼水晶。手に入れると、妖力が強くなる、あやかし 妖達の宝玉なのさ」

ほたるは、葛の木様を見た。

「そんなの、祓えないに決まつてるじゃん」

葛の木様は、面を付けていて表情が分からぬ。

「ん――――。あ、そうじゅ。これを使つといふ
そつ言つて袖から何か取り出した。取り出すと、ショットと大きくな
つた。

「・・・・・！」だ。・・・でもね、私撃てないよ
「何――――――！？」

葛の木様の驚きは、半端ない。

「そんなこと言わないでおくれよ」

「そんなこと言つたつて・・・・・」

はたるはため息をついた。

「鬼水晶をくれるなら、手伝つてやつても良い」

彪の一言に、ほたるも、葛の木も目を輝かせた。

「もらつていいくから、力を貸して」

「若菜さんを助けてくれ――」

こうして、2人と1匹の悪霊退治が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3341z/>

気まぐれ猫の散歩

2011年12月20日16時51分発行